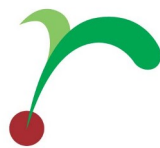




# ライス通信

第8号  
2009年 5月発行

NPO法人リヴォルヴ 学校教育研究所



**二の宮事務所**  
〒305-0051 つくば市二の宮4-8-3 1-404  
電話/FAX 029(856)8143

**ライス学園 谷田部教室**  
〒305-0861 つくば市谷田部2983 (アラキヤさん2階)  
電話/FAX 029(836)8447  
E-mail rise@cure.ocn.ne.jp  
ホームページ http://www.rise.gr.jp

## ますます充実！ ライス学園

一昨年、昨年と多くの子ども達がライス学園を巣立っていきました。通園を続けている子ども達も、教科の学習やその他の活動に積極的に取り組んでいます。ここ数年特に目を見張るのは、教科学習での伸びです。見る見る力をつけ、学校の先生方も驚くほどの成績で、高校や大学への進学を果たしたり、「勉強は苦手」だったはずが英語検定試験等で素晴らしい成績を残した子もいます。

平成12年度の開級以来、ライス学園への延べ出席者は1万人を越えました。昨年はOne by Oneこども基金から「子ども達の支援のために活発に活動し、顕著な成果をあげている非営利団体」としても表彰を受けました。

ライス学園では今後、スポーツ教室や各種の体験教室とともに教科学習支援にも力を注ぎ、一人ひとりの自己実現をサポートしていきたいと考えています。



アクティブつくば  
山本さん

サンシャイン  
ウェルネスクラブ  
(左から) 本村さん  
橋本さん、瀬戸島さん



スポーツの時間もリニューアル。先日は縄跳びアジアチャンピオンのまっちゃんが来園。サンシャイン・ウェルネスクラブでのシェーブアップ教室は毎月1回の開催となりました。

カルチャー教室、その他の体験教室もますます充実しています

穴塚大池自然観察



調理教室



お箏教室



木工教室



## 新スタッフをご紹介します

「たっちゃん」こと龍井昇治先生が現場を退かれ、長年勤務した盛弓子氏も、3月に退職。ライス学園を巣立ったスタッフの多くは、教育や心理などの各分野で活躍しています。

そしてまた新たに、4名の新スタッフを迎えました。まだまだ至らない点が多い私達ですが、今後も研修を重ねより充実したサポートを心がけてまいります。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

- 本名(ふりがな)**
- ニックネーム
  - 担当教科
  - 資格・職業その他
  - 好きなことば



### 椎名 千春

- ちゃあぼう
- 事務
- 経理実務士
- ありがとう



### 上倉 久美

- みどり先生
- 小学国語・中学理科
- 臨床心理士
- 七転八起



### 阿波田 栄子

- あわ
- 小学数学・教科サポート
- カウンセラー・声楽家
- なぜば成る



### 定廣 英典

- サダ
- 教科サポート
- 筑波大学大学院生
- 千里の道も一歩から



## ひらがな練習ソフト 1,000枚 を無償配布

2008年度に「郵政事業株式会社」「中央労働金庫」「マイクロソフト株式会社」から助成金をいただき、ひらがなや英語の読み書き練習コンピュータソフトの開発に取り組みました。そのうちひらがな練習ソフト「ひらがなの森 ver1.0」が3月に完成し、申込みのあった全国の小学校や特別支援学校に1,000枚を無償で配布しました。

知的には目立った遅れがないのに、読み書きに困難を示す子ども達があります。しかしそんな彼らは、ダ・ヴィンチやアインシュタインのような素晴らしい可能性を秘めていることも少なくはないのです。

私達はこれまで、「ひらがなれんしゅうちょう」「英語れんしゅうちょう」の普及に努めてきました。障害を抱え、「この子には無理だとあきらめていました」というお母さんからは、「ひらがなの読み書きができるようになり、カタカナにも自ら挑戦を始めました」という喜びの声が寄せられました。顕著ではなくとも、読み書きに不器用さを抱え伸び悩んでいた子が、自信を身につけ別人のように生き生きと学び始めた姿も見てまいりました。

今回の無償配布の目的は、発達性ディスレクシアと呼ばれる読み書き障害、困難への理解を深めること、そしてちょっとした指導上の工夫が、子どもたちのつまずきを大幅に軽減するものであることを理解していただくことにあります。大きくつまずいてからではなく、「転ばぬ先の杖」として活用いただければと思います。

ひらがなれんしゅうちょう準拠ソフト  
ひらがなの森 ver. 1.0



## ライスのあしあと

### 2008年 5月

- 第6回総会を開催
- 田植え体験を実施  
【協力 NPO法人自然生クラブ】

### 2008年 7月

- カルチャー教室開始(～3月まで)
- ライス学園「オープンスクール」

### 2008年 8月

- ライス学園「オープンスクール」

### 2008年 9月

- 稲刈り体験を実施  
【協力 NPO法人自然生クラブ】

### 2008年 10月

- 放課後子どもプラン勉強会を美浦にて実施

### 2008年 11月

- 豊里ゆかりの森にて保護者参加の焼き芋・バーベキュー大会を実施
- 日本LD学会第17回広島大会にて  
口頭発表「つまずきを軽減・回避する英語指導の工夫」

### 2008年 12月

- 「つくば100本のクリスマスツリー」に参加。

- NPO法人世界の子どもにワクチンを日本委員会の方を招いての特別授業

### 2009年 1月

- そば打ち体験を実施  
【協力 内藤寿司他千歳通りの地域の方々】

### 2009年 3月

- 筑波山への遠足を実施
- 教育公開講座「中1ギャップを克服する小学校英語指導のポイント」をつくば、東京の2会場で実施

## 「英語の森 ver.1.0」もまもなく完成

小学校でも英語の授業が始まりつつあります。しかしそこで危惧されるのは、子ども達のつまずきという観点からの話し合いが十分に行われていないことです。

日本語では3%前後(\*)とされる読み書き障害の出現率ですが、英語では20%(Shaywitz, S. 2006)という調査報告もあります。つまり日本の子ども達も、英語の読み書きにおいては5人に1人、またそれ以上の確率で読み書きに困難を抱えることが予想されます。

読み書き障害の主たる原因としては文字を音声化するレベルでの困難、具体的にいえば「h」と「it」を足せば「hit」となり、「hat」から「h」をとれば「at」になるといった「音の足し算、引き算」の困難が挙げられています。ところが日本語では「hi」は「ひ」であって、英語のような音の足し算や引き算はあまり必要とされません。だから日本語では、読み書き障害の出現率は低くなる。しかしこのことはまた、日本人が音韻操作に不慣れとなりがちであることを示唆しています。

まもなく完成予定の「英語の森 ver1.0」は、日本人ならではのつまずきにも着目したものとなっています。これらの教材は、新たに開設するウェブサイト「森の教材館 マナビィ」を通じて頒布の予定です。そこから得られた収益をライス学園の運営等に充てることで、子ども達を取り巻く教育環境の一層の充実にも努めます。

英語れんしゅうちょう準拠ソフト  
英語の森 ver. 1.0



近日アツツ!



森の教材館 マナビィ

http://manabee.dennogo.jp/

\* 日本の子ども達を対象に行った調査では、ひらがな、カタカナの音読障害は約1%、漢字は5.0%。書字障害はひらがな1.0%、カタカナ2.0%、漢字は8%という報告もあります。(宇野 2007)

## クマと もいと 学校教育

～マナビ・ネット カルチャー教室から～

人が手をつけ、放置した森は、荒み果て、私達が暮らす社会を鏡に映しているかのようだ。針葉樹ばかりの森には日が差し込まない。下草は枯れ、そこでは虫達でさえ満足に暮らせない。

昨年、日本熊森協会の森山まり子さんをお招きし、ライズ学園の子ども達とともにお話を伺った。いろいろな意味で、心を打たれたお話だった。

### ○ もいと 若者 ○

熊はもともと臆病な動物で、自分から人を襲ったりすることは決してないようだ。たしかに山を歩いていても、熊鈴などをつけていけば、熊から人間に近づいてくることはない。しかし腹を空かせてがりがりにやせ細った彼らは、やむなく人里に降りてくる。危害を加えられた経験をもつ彼らがそこでぼったりと人と出くわしたとき、自分を守ろうとする一心でその前足を振るう。そして彼らは、射殺される。その姿に私は、今の学校教育制度に適合できず、社会からは阻害され、行き場を失った若者達の姿を重ねてしまった。

人に危害を加えることは、決して許されない。しかしそれを彼らのせいだけにできるだろうか。森からさまよい出てきた熊達から見たとき、私達は自分が加害者ではないと言い切れるだろうか。公立学校で16年間、教師然としていた私には、自分が加害者ではないと言い切るだけの自信がない。

司馬遼太郎氏はその作品「世に棲む日日」の中で、「もともと教育という公設機関は、少年や青年というものの平均像を基準とし、一定の課程を強制することによってかれらの平均的成長を期待しうるものとして、設置され、運営されている。自然、平凡な学生にとっては学校ほど有意義な存在はないかもしれないが、精神と智能の活動の異常に活発すぎる青年 一天才とっていいー にとっては、この平均化された教授内容や教育的雰囲気というもののほど、有害なものはないかもしれない」（一部中略）と言っている。

LD（学習障害または学習差異）などを抱える子ども達の手すべてが、天才だというわけではない。しかしその中にはたしかに、天才としての資質を備えた子がいる。そうでなかったとしても、一人ひとりが異なる可能性を秘めた貴重な存在であることには違いがない。少なからずそんな子ども達が、今、学校という制度の中で苦しんでいる。



### ○ 高いこころざし ○

日本熊森協会の森山さんも公立中学校で教師をされていたそう。協会が発行している小冊子をめくると、まず初めに「愛は、言葉ではなく 行動である」という言葉が目飛び込んでくる。そしてその次のページには、「ツキノワグマ絶滅寸前」と題された短文が載せられている。



1992年、1人の女子生徒が、ツキノワグマが絶滅の危機に瀕していることを伝える新聞記事を持ってきました。この記事によって、日本の奥地の広大な森が大荒廃していることを、私達は知りました。

えさ場を失い、おなかをすかせて仕方なく森から人里へ出て来ては、次々と有害獣として射殺されてしまう、クマなどの大型野生動物たち。彼らを絶滅から救おうと、中学生たちは立ち上がりました。

そして、豊かな森を失い滅びようとしているのは、クマだけでなく人間を含めた全生物であることに気づいたのです。

日本熊森協会 <http://homepage2.nifty.com/kumamori/>

森山先生も当初はあまり乗り気でなく、生徒達に突き動かされるようにして取り組み始めたそう。当時の兵庫県には60頭ほどの熊がいたそうだが、それが狩猟と有害駆除で年間30頭のペースで殺されていた。しかし「害獣である熊を守れとは何ごとか」と叱られたり、協力してくれるはずだった大学教授には「熊は絶滅の恐れがない」と言い出されたりと、ずいぶんひどい目にも合わされたそう。だが、彼女が勤務した中学校の生徒達は、負けなかった。中学生達は「大人達に言い負けないように、こうなったら自分達がしっかり勉強するしかない」と立ち上がったそう。熊と森を守る活動を始めた結果、生徒達の成績は大きく向上した。彼女は「高い志を持った瞬間から、子どもというものは、勉強しろなんて言われなくても、どんどんし始めることを知りました。いじめ問題もなくなりました」と書いている。

「高い志」

しばらくぶりに物置の奥から取り出した野球のグローブのような、ちょっとかび臭い言葉だ。しかしこれは今後の教育のあり方を考える上での、1つのキーワードであるに違いない。



### ○ 学校はどこへ行こうとしているのか ○

総合学習を推進した人々が目指していたものも、これだったに違いない。しかしどのように言い繕おうとも、その取り組みは十分な成果をあげていない。当時文部科学省にあってその旗振り役を果たした担当官が茨城にいらしたときに、私は「総合学習の導入に賛成です。しかしこのままでは早晚失敗することになります」と話し、「地域に暮らす人々の協力をいかに得るかなどの課題を、どのようにしてクリアしていくつもりか」とたずねた。私としては、賛成だからこそ、そして成功させたいからこそその質問だった。しかし彼は、私が発した「失敗」という言葉だけにこだわり、「あなたはあなたの学校しか見ていない。私は全国の学校を見てきている。他の地域ではうまくいっていますよ」と言って、私の質問を跳ね除けた。

今また、「21世紀に生きる日本人」とか「国際人を育てる」などの美辞を並べて、小学校での英語教育が始まろうとしている。私はこれにも反対はしない。しかしそこには、高い志はあるのだろうか。ひょっとしたら、企業にとって有用な人材、競争の激しい国際ビジネスの社会に対応しうる人材を育成しようとするのが、その本音ではないのだろうか。小学校への英語導入に際しても、子ども達のつまずきという観点からの議論がおろそかにされがちなのは、そのあたりに理由があるのではないだろうか。

森が荒れ果てたのも、熊達が飢えるのも、目先の利益ばかりを考えて、森本来の多様性を無視した結果だ。広葉樹と針葉樹が混在し、下草が地面を覆う健康な森でなければ、結局は針葉樹も育たない。針葉樹ばかりの森は保水性に乏しく、川は枯れ、農業や漁業にまで悪影響を及ぼすようになる。

国際理解教育などと格好をつけたところで、隣の席に座っている子のしんどさを理解できない子を「21世紀に生きる日本人」と呼ぶことができるのだろうか。日本熊森協会は、熊だけを守ろうという団体ではない。熊をシンボルとして、森そのものとその恩恵を受けて暮らすすべての生き物、人間も含めて、を守ろうとする団体だ。会が訴えるのは、「熊を大切にできないような世の中は、人も大切にできない」ということになるのだろう。

(文・小野村 哲)

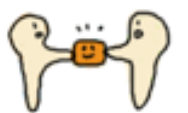
## 正会員・賛助会員募集

私達は今後も一層の研鑽に励み、活動を充実させてまいります。皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

《支援方法》

### ○ 会員として入会いただく

正会員 個人 5,000円 団体 10,000円 学生 2,500円  
賛助会員 個人1口 3,000円 団体1口 5,000円  
☆会員特典として、セミナー参加費割引、出版物購入割引などがあります



### ○ 寄付をしていただく

寄付は随時受け付けております。使用済みの教科書（小中学生用現行版）やスポーツ用品、文具等もご寄付いただくと助かります。

### ○ 教材をご購入、紹介いただく

ライズ学園における実践の成果をまとめた教材を販売しています。詳細はホームページをご覧ください。

《会費・寄付の振込先》

・郵便局  
(郵便振替) 00120-5-171173 特定非営利活動法人リゾ学園 学校教育研究所  
(ぱるる) 記号 10600 35657951 特定非営利活動法人リゾ学園 学校教育研究所  
・銀行  
常陽銀行 研究学園都市支店 店番104 普通1822778  
特定非営利活動法人リゾ学園 学校教育研究所 理事長 小野村 哲 (オムラ サシ)

## 編集後記

2008年度は、3つの助成金をいただくという嬉しい出来事に始まり、One by Oneこども基金からはNPO奨励賞をいただきました。3月に開催した教育公開講座には、遠くは鳥取からの参加者も。また、5段階評価で4.8という高い評価をいただきました。そして先日は、ライズ学園卒園生の懐かしい声を聞くこともできました。

来年は法人設立10年を迎えます。ずっと一緒だった盛さんとお別れはさびしいですが、これからもさらに飛躍できるよう、気持ちを新たに頑張っていきたいと思っております。  
(北村)